

日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望 ：日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に

著者	宇佐美 まゆみ
雑誌名	社会言語科学
巻	18
号	1
ページ	7-22
発行年	2015-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1328/00003592/

doi: 10.19024/jajls.18.1_7

展望論文

日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望

—日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に—

宇佐美まゆみ (東京外国語大学大学院)

言葉と社会にかかわる現象を研究する「社会言語科学」において、「スタイル」に関する研究は、中心的課題の一つと言っても過言ではない。ただ、一口に「スタイル」の研究と言っても、その分野、目的、扱うデータなどは多岐にわたっている。これだけ多様な研究が蓄積されてきた現状においては、研究目的との関係も含めて、関連する分野や類似の用語・概念を整理した上で、個々の研究の位置づけや意義、議論されるべき内容、当該研究が貢献しうる分野を明らかにする必要がある。本稿では、このような考えに基づいて、日本語について「スタイル」という用語が用いられている関連の研究、及び、類似の用語や概念が用いられている関連の研究を整理した上で、主に、談話研究、日本語教育研究の文脈で行われている「スピーチレベル」のシフト現象について、「敬語レベル」、「待遇レベル」、「スピーチスタイル」等の用語との区別にも触れながらポライトネス理論の観点から概観する。その上で、筆者の考えと立場、今後の研究の展望をまとめる。

キーワード：スタイル, スピーチスタイル, スピーチレベル, スピーチレベルシフト, 話し言葉

On Styles in Japanese Language:

Focusing on 'Speech-Level Shift' in Japanese Conversational Discourse

Mayumi USAMI (Graduate School, Tokyo University of Foreign Studies)

The study on "style" in Japanese is one of the major research topics in sociolinguistic science, which studies the relationship between language and society. However, since the fields, purposes, and data used in studies on "style" are varied and numerous studies in related fields have been carried out, it is important to clarify the meaning of the specific terms and concepts which have been used. By doing so, we can place each study in its appropriate position, determine the important discussion topics, and evaluate the significance of research in the field. In this paper, I begin by reviewing studies in which the term "style" is used or the similar phenomena of "speech style shift" in Japanese. Following this, I discuss "speech-level shift" in Japanese conversational discourse in the field of discourse studies and Japanese language education studies. I also discuss the difference between terms such as "speech level", "honorific level", "taigu (treatment) level", and "speech style". Finally, I discuss the significance of studies which deal with "speech-level shift" in Japanese conversation from the viewpoint of "discourse politeness theory", and present perspectives from the viewpoints of pragmatics and interpersonal communication.

Key words: style, speech style, speech level, speech level shift, spoken language

1. はじめに

本誌において「スタイルの生成と選択」の特集が組まれることから明らかなように、言語と社会にかかわる現象を研究する「社会言語科学」においては、「スタイル」に関する研究は、中心的課題の一つと言っても過言ではない。ただ、一口に「スタイル」の研究と言っても、その分野、目的、対象とするデータなどは多岐にわたり、その違いが明確に区別されることなく、類似の用語の中の一つが選択されている場合もあるのが、実情である。確かに、現実的には、紙幅に制限がある一論文の中で、扱う対象や選択した「用語」自体の詳細な定義や類似の用語との区別にまで紙幅を割く余裕がないことが多いとも言える。また、その論文の中で特定の用語がどのような意味で用いられているかは、その論文の内容を読めばわかるということもある。

しかしながら、これだけ様々な研究が蓄積されてきた現状においては、研究目的との関係も含めて、関連する類似の用語や概念を整理しておかなければ、誤解や混乱が生じやすくなってしまい、個々の研究の位置づけや意義、議論されるべき内容、当該研究が貢献しうる分野が不明瞭になってしまい、建設的な議論が深まらないということも起こり得るだろう。

このような状況が認識されてか、近年では、「スタイル」に関係する研究において用いられている種々の用語やアプローチを整理する概観論文も現れてきている(陳, 2004b; 黒木, 2015; 宮武, 2009; 渋谷, 2008等)。「スタイルの生成と選択」にかかわる様々な研究についても、まずは、その分野、目的や扱う範囲、そこで用いられている用語の定義などを整理しておく必要がある。特に、1980年代以降は、日本における日本語研究のみならず、欧米で発展してきた社会言語学における研究との交流も増えていった。このような現状を考えると、「日本語の研究」も、「日本における日本語の研究」の概観だけでは、十分とは言えない状況になってきている。日本語の用語の問題は、英語からの翻訳の問題であることもあり、今後は、逆に、英語で発信する

際のこととも考えながら用語の選択を行うことが、これまで以上に重要になってきていると言えるだろう。

本稿では、このような考えに基づき、まずは、本特集に合わせる形で、「スタイル」という用語が用いられている関連の研究、及び、類似の用語や概念が用いられている関連の研究を、海外における社会言語学の研究動向も踏まえながら整理する。その上で、主に、談話研究、日本語教育研究の文脈で行われている「スピーチレベルシフト」(「スピーチスタイル」、「敬語レベル」、「待遇レベル」の用語の区別については、4.2を参照)に関する研究を中心に概観する。その上で、筆者の考えと立場、今後の研究の展望をまとめる。

2. 「スタイル」という用語が用いられる国内外の言語にかかわる研究の概観

より詳細な用語の区別については後述するが、言語に関する「スタイル」という用語は、類似の用語の中でも、最も広く解釈でき、また、言語研究のみならず、多様な分野で、それぞれの観点から研究されてきている。最も広くは、「作家の(表現)スタイル」、「作家の文体」、「小説のスタイル」というような意味で使われることも多く、文学論、作家論、文体論などとも関係してくる。ただ、社会言語学におけるスタイル研究は、「作家の文体(スタイル)」などの「作家独自の言語的特徴」に踏み込むものは扱わないとするものが多い。以下の2.1では、より「言語」に焦点を当てた研究に絞ってまとめる。

2.1 日本の社会言語学における日本語の「スタイル」研究

「言語」の研究に焦点を絞った研究の文脈では、「スタイル」の研究は、主に、社会言語学におけるバリエーション研究の一環として扱われることが多い。社会言語学において、地域による言葉の変種である「地域方言」や職業や階層の違いによる変種である「社会方言」が、「話し手の属性と結びついた言葉の多様性」と位置づけられて研究されるのに対して、「スタイル」のほうは、「同じ一人の話し手や書き手が、聞き手や読み手、場面、目的、メディア

などに応じて使い分けることばの多様性、レポーター」(渋谷, 2008), 「コンテキストに応じて一話者内で観察されるバリエーション」(高野, 2012)などと定義されているように、「個人の、一言語内の複数の変種の使い分け」を扱うものとされている。また、基本的には、ある場面で使用されることば全体を総称して言う場合が多い。これは、デスマス体を使うと「フォーマルなスタイル」になるとか、非デスマス体は、「カジュアルなスタイル」だというような言い方からもわかるだろう。ただ、その全体的なスタイルを特徴づけるのは、デスマス体の使用・不使用の違いだけでなく、種々の言語項目(言語要素)であり、終助詞・間投助詞(ネとノ・ナ・サ)、アスペクト形式(テイルとヨル・トル)等々も関係する。さらには、「勧め方」や「誘い方」などの発話行為も、「スタイル」として捉えられるとしている(渋谷, 2008)。この「発話行為のスタイル」の研究は、次の2.2に概観する「会話スタイル」、「コミュニケーション・スタイル」の研究にも通じるものであり、今後の発展が期待される場所である。

これらの定義を厳密に解釈すると、後述する「スピーチレベルシフト」が主に扱っている「同一会話内におけるスピーチレベルの一時的シフト」は、「スピーチスタイル」の研究とは、区別して位置づけることもできる。しかし、実際には、これらが扱う範囲や用語が定義する現象の厳密な区別は難しいところもある。その結果、同じ「スタイル」という用語が、多様な分野で様々な使われ方をすると同時に、ある分野では、同様の現象を指すものとして、「スタイル」以外にも複数の類似の用語が用いられるという状況を生んでいる(これについては、4.1, 4.2で論じる)。

最近では、特定のスタイルのイメージが、「人物の属性と心理的に結びつけられたスピーチスタイル」と定義されている「役割語」(金水, 2007)として機能していくメカニズムや、特定のスピーチスタイルが負のステレオタイプに結びつく危険性の問題の解明など「スピーチスタイル」に関する研究課題は、さらなる広がりを見せている。ただし、「スピーチスタイル」や、後述する「コミュニケーション

ン・スタイル」が、ステレオタイプとして、ある「社会的イメージ」の形成にいかにかかわっているかというようなプロセスやメカニズムを解明しようとする研究は、既に、「心理学」、「異文化間コミュニケーション」分野等において、様々な観点から行われてきている。また、いわゆる「役割語」が、ステレオタイプ化されたキャラクターと関連づけられる特徴的な言語表現であると考えれば、「表現スタイル」の研究とも関係してくるだろう。つまり、本特集の「スタイルの生成と選択」というテーマは、もはや言語研究の域を超えようとしているテーマであるとも言える。

ただ、ここでは、「スタイル」の社会言語学的な研究を整理しておく。概ね以下の4つにまとめられよう。

- ① 「スタイルの言語的実態」を記述する研究
- ② 「スタイルの社会的機能」を解明する研究
- ③ 「スタイルの切り替え(コード・スイッチング等)」の意図や効果を追究する研究
- ④ 「スタイルとアイデンティティ」の関係を追究する研究

すなわち、スタイルは、単なるバリエーションの記述研究としてだけではなく、言語使用や社会的機能の観点、スタイルの交替というような動的視点、さらには、言語と切り離すことのできないものとしての「アイデンティティ」という心理的機能も考慮に入れた、新しい意味での「社会言語学的観点」から研究される必要があると言えるだろう。

2.2 欧米の社会言語学、談話研究、及び、関連分野の影響を受けた日本語の「スタイル」研究

2.1で概観した日本語の社会言語学的分析で扱われる現象と重なる部分もあるものの、少し異なった文脈、観点の研究においても、「スタイル」という用語が用いられている。それは、主に、以下の相互に関連する4つの分野においてである。①1980年代以降、欧米の社会言語学において盛んになった「相互作用の社会言語学(interactional sociolinguistics)¹⁾の一環として行われた「会話スタイル(conversational style)」(Tannen, 1984等)の研究²⁾の影響を受けた研究、②社会言語学という

より「異文化間コミュニケーション」研究の一環として行われる、自然会話をデータとした「コミュニケーション・スタイル」の研究 (FitzGerald, 2003, 村田監訳, 2010; Hall, 1976, 岩田・谷訳, 1979等), ③それらの研究とも相互に影響を与え合っている「第二言語習得論」において、コミュニケーション能力の習得を扱う研究における「コミュニケーション・スタイル」の研究, そして, ④同じく「第二言語習得論」で扱われる「学習スタイル」に関する研究 (概観は, 真嶋, 2005を参照) においてである。

これら, 「異文化間コミュニケーション論」, 「第二言語習得論」, 「学習理論」, 「教育学」なども含む, 相互に影響を与え合う関連領域の「欧米における研究動向」の影響を受けて盛んになった日本の研究にも, 「スタイル」という用語がよく用いられるようになった。日本語で書かれた論文で用いられる「会話スタイル」, 「コミュニケーション・スタイル」, 「学習スタイル」という用語は, 元々英語で用いられた ‘conversational style’, ‘communication style’, ‘learning style’ の日本語訳として用いられるようになったものである。しかし, これらの研究の中でも, 特に, 会話データを分析した研究など, 「言語」を切り口とした研究は, 様々な分野の研究や異なるアプローチが一括された感は否めないものの, 「談話分析」, 「会話分析」, 「談話研究」³⁾, 「コミュニケーション研究」などという用語でまとめられて, 今日では, 日本の社会言語学においても, 一つの分野として位置づけられるようになった。

また, これらの研究は, 欧米の社会言語学の影響を受けていることもあって, 「日本語の社会言語学的研究」というよりは, 日英の対照研究という形で扱われることも多い (津田・村田・大谷・岩田・重光・大塚, 2015)。そのため, 日本における「英語教育」の分野とも関係してくる。また, 主に, 日本語で書かれた論文に倣う形で, 日中, 日韓など, 英語以外の言語と日本語の対照研究においても, 「会話スタイル」が扱われるようになってきており, 今日では, 様々な観点からの研究が盛んになってきている。国内外の移動手段の発達によって, 異文化を背景とする人との交流の機会が増加するとともに,

マスコミやインターネットによる情報の共有化がますます進む今日, 言語・文化や地域による特徴を踏まえて, 個人が, 社会言語学でいう「スタイル」として, 「コミュニケーション・スタイル」, 「会話スタイル」を切り替えるという現象も, 今後, より頻繁に起こってくるだろう。そういう意味で, 「コミュニケーション・スタイル」, 「会話スタイル」の研究は, 日本の社会言語学で伝統的に扱われてきた「スタイル」の研究とも無関係ではない。今後, 上記のような分野との相互交流, 相互の研究の発展が大いに期待される。

2.3 日本語会話における「スピーチレベル」の「シフト」に関する国内外の研究

日本語会話を対象にし, 「スピーチレベル」という用語を用いた「スピーチレベルシフト」の研究は, 広義では, スタイルの研究の一種とも言えよう。しかし, 元々この現象に興味を持たれるようになったのは, 上記, 2.1で概観したような「社会言語学」における「バリエーション研究」の一種としてというより, むしろ, 談話研究やポライトネス理論など, 談話レベルの対人コミュニケーション研究と密接に関係した「談話の語用論的観点」から着目されはじめ, さらに, ポライトネス理論の普遍性を検証しようとする実証的研究において盛んに行われるようになった (Ikuta, 1983; 宇佐美, 1995, 1998b, 2001a; Usami, 2002等)。

これらの研究では, 2.1で概観したような, 一話者が用いる「全体的なスタイル」の切り替えというよりは, 実際の会話において, 文末のデスマス体と非デスマス体が「同一相手との同一会話内で, 一時的にシフトしたり, 元に戻ったりする現象」を扱うため, 「文体」ではなく, よりニュートラルなニュアンスの強い「スピーチレベル」が用いられる。そして「同一会話内におけるデスマス体の使用・不使用の一時的なシフト」が「スピーチレベルシフト」と呼ばれる (宇佐美, 1995)。ただ, 関連の研究に, 主に文末のデスマス体と非デスマス体のシフト現象が日本語のポライトネスにいかにかかわっているかということに関心を持つ研究が多いことから, 「敬語レベル」や「待遇レベル」という用語も用いられ

た（これらのニュアンスの違いについては4.2を参照）。

また、デスマス体、非デスマス体は、伝統的な書き言葉に関する研究では、「文体の種類」として扱われてきたことや、会話データを用いた「スピーチレベルシフト」を扱っていても、同一研究の中で小説の会話文や、随筆などにおける同様の現象を扱う比較研究では、「文体」、「文体混用」（メイナード、1991）が使われる。また、教室場面をデータとして、デスマス体と非デスマス体の「指標的機能」を扱った研究（岡本、1997）でも「文体シフト」が用いられている。さらには、日本における日本語の書き言葉の研究でよく用いられてきた「文体」にかかわることもあり、「文体シフト」の「文体」の英語訳（‘style’）が逆にそのまま日本語に戻された形で、「スタイル・シフト」が用いられることもある。「話し言葉におけるスタイル」に「文体」という用語はそぐわないと考えられたこともあるだろう。

また、同一会話においても、時間の経過とともに、スピーチレベルがデスマス体からダ体へと「全体的にシフト」する過程を「デスマス体の使用率」の変化に着目して分析したような研究（伊集院、2004；申、2007）や、デスマス体からダ体へのシフトだけでなく、老人や幼児のような話し方へのシフトも扱われているような研究（大津、2007）では、「スピーチスタイルシフト」が使われている。

一方、ニュートラルに「言語形式の丁寧度」として捉えられた「スピーチレベル」の同一談話内における「一時的シフト」という「動き」に着目したことに端を発する一連の研究では、基本的に「スピーチレベルシフト」という用語が用いられる。しかし、スピーチレベルシフトと同じ現象を同様の観点から扱う研究でも、言語形式の丁寧度がかかわるため、「敬語レベル」や「待遇レベル」という用語が用いられている場合もある。一方、同じようなスピーチレベルの一時的シフト現象を扱っても、スピーチレベルの選択を「全体的なスタイル（文体）」の選択として捉え、「そのスタイルが一時的にシフトした」と捉える場合は、「文体シフト」、「スピーチスタイルシフト」が用いられているようである。ここに、

自ずと各研究者が自身の研究や関心をどのように位置づけているかが表れている（ただし、その位置づけの妥当性には、検討の余地があるものや、用語の違いにさほどこだわっていないように見受けられる研究もある）。

まとめると、「スピーチレベルのシフト」に関する研究における「スピーチレベル」と「スピーチスタイル」という用語の選択の違いは、文末の「スピーチレベル」を、ニュートラルな「言語形式の丁寧度」と捉え、その同一談話内における「一時的シフト」の機能や効果を明らかにしたり、ポライトネス理論との関係を追究しようとするのか、あるいは、文末の「スピーチレベル」を「文体（スタイル）」と捉え、同一談話内における一時的なシフトについても、それを「異なる文体（スタイル）の切り替え」とみなして、その効果を分析するののかという研究者の現象の捉え方や関心の違いによるものだろう。

これらの研究を位置づけてみると、「文体シフト」、「スタイルシフト」に関する研究は、広くは、一人の話者が、聞き手や、場面、目的、メディアなどに応じて使い分けることばの多様性、バリエーション研究の中に位置づけられるが、その単なる記述研究とは異なり、2.1でまとめた③の「スタイルの切り替え（コード・スイッチング等）」の意図や効果を追究する研究、に位置づけられると言えよう。一方、「スピーチレベルシフト」の研究は、同じ談話・会話の中で、一時的に生じるスピーチレベルの「シフト」という動きに着目した、談話研究、語用論、対人コミュニケーション論などの研究として位置づけられると言えるだろう。

本稿では、上記のような「スタイル」という用語が使われることもある様々な研究の中で、無意識的な現象としての「スピーチレベルシフト」を扱っている研究を、個々の研究が用いている用語や観点にこだわらず取り上げて、概観する。

次の3.では、まず、「スピーチレベルシフト」現象が観察され着目されることになった、会話をデータとする研究、すなわち「話し言葉」の研究が、国内外で、どのような経緯で行われるようになってきたかということをもとめておく。その上で、「スピー

チレベルシフト」研究が、談話研究、語用論、対人コミュニケーション研究において、どのような意味を持っているかを論じる。

3. 国内外の話し言葉と書き言葉の研究における「スピーチレベルシフト」に関する研究

ここでは、「スピーチレベル」(「スピーチスタイル」,「文体」等)の「使い分け」,「切り替え」,「交替」,「シフト」などの用語で言及されている現象を、「スピーチレベルシフト」としてまとめ、国内外の話し言葉の研究、書き言葉の研究ごとに概観する。

3.1 日本の社会言語学における「話し言葉」研究の位置づけと展開

まず、スピーチレベルシフト研究が主にデータとする「話し言葉」が日本の社会言語学において、いかに扱われてきたかを概観しておく。敗戦を境にして、日本の国語学に、日本独特の主に話し言葉を研究する「言語生活」という研究領域が新たに加えられた。その後、「言語技術」の研究ともあいまって展開し(金田一, 1957), 1958年には、その研究の基礎がほぼ確立したと位置づけられている(宇野, 1959)。これは、後述する欧米の社会言語学の事実上の発祥(1964年)と比べても早いとも言える。前川(2014)も、国立国語研究所の『談話語の実態』(1955)は、「話し言葉について「均衡した」データを作成しようとした試みとしては世界最初と思われる」としている。

しかし、日本に端を発する独自の「話し言葉」の研究は、1960年代後半から1970年代のはじめにかけて、一時衰退し、皮肉にも同時期に、アメリカをはじめとする世界の諸地域で、日本の「言語生活研究」と多くの共通点を持つ「社会言語学」が盛んになったことを受けて、当時の国語学会(現日本語学会)の学会誌である『国語学』(現『日本語の研究』)の展望号で一分野を成していた「言語生活」の英語名が、1974年(南, 1974)から、それまでの language life⁴⁾ から sociolinguistics になった。その後、「言語生活」の展望は、欧米の「社会言語学」の動向も踏まえながら、事実上、社会言語学の枠組みで行われるようになった。岩淵匡は、1980年の「言語生活」

展望で、日本における「言語生活史研究」における方法論確立の立ち遅れ(傍点筆者)を指摘し、その後の欧米の影響を受けた「社会言語学的研究」の隆盛を予想していた(岩淵, 1980)。しかし、その後、1990年代から2000年代に入って、欧米においても、日本の「言語生活」の一部として行われていたような「実際の会話を録音したデータ」の有用性が主張され、実際の会話データを用いた研究が盛んになると、社会言語学の枠組みの強化と日本独自の研究の再評価と継続を望む双方の意向を反映させてか、「2002年・2003年の展望」(吉岡, 2004)からは、名称が「社会言語・言語生活」となった。

宇佐美(2008a)では、2007年までの約20年の『国語学』の展望で扱われたものを、改めて「社会言語・言語生活」の2つに分けて考えると、現在では、前者の「社会言語」がいわゆる「社会言語学(sociolinguistics)」に、そして、後者の「言語生活」は、1960年代から欧米で盛んになった「語用論(pragmatics)」に関する研究にほぼ相当しているように思われると指摘している。

さて、日本には独自の「話し言葉」の研究が「言語生活」の研究という位置づけで存在していたものの、残念ながら、科学的な方法論の構築や、相互作用の動的研究には、発展しなかった。今日盛んである欧米の研究に触発された「スピーチレベル」にかかわる研究も、当然ながら、「敬語研究」としては、膨大な研究成果と蓄積があった。しかし、日本における敬語研究の軸は、規範としての敬語使用の原則を扱うものがほとんどで、「言語生活」研究において収集されていた「自然会話データ」の分析も、具体的な記述が中心となり、「スピーチレベル」の「シフト」というようなダイナミックな動きに着目し、研究対象とするような研究にまでは発展しなかった。また、日本語という個別言語における「敬語」の研究を超えて、他の言語も包括的に捉えて理論化しようというような、対照研究を踏まえた「普遍理論構築」への志向は、残念ながら生まれてこなかった。

3.2 欧米の言語に関係する研究分野における「話

「話し言葉」研究の位置づけと展開

欧米で発達してきた伝統的な言語学においては、研究対象の主体は「書き言葉」であり、十分に計画する間もなく発せられる「話し言葉」は、文法的にも整っていないため、言語学の研究対象とはならないとみなされてきた。それが、1960年代半ばから70年代にかけて、言語哲学分野の「発話行為理論」(Austin, 1962)や、社会学の一派としてのエスノメソドロジストによる「会話分析 (Conversation Analysis: CA)」(Sacks, 1963)が提唱されると、言語学の分野においても、今日的な意味での「語用論」が飛躍的に発展していった。文化人類学者の Hymes (1974) は、従来の言語学が、言語の構造と使用の二側面のうち、構造の研究のみに偏っていたことに疑問を呈し、N. A. Chomsky の linguistic competence (言語能力) に対して communicative competence (伝達能力) という概念を提出し、それまでの理論中心の言語学の方向性を見直しと新たな枠組みの必要性を提唱した。また、言語人類学者であった Gumperz (1982) は、言語研究は、言語を単なる「抽象的な研究対象」とみなすのではなく、「様々な文化や社会の抱える言語にかかわる社会的、人種的問題の解決法を模索する手段」となるべきであると主張した。そして、人種や社会階級、教育程度の違いなどによって引き起こされる様々な問題の解決のためには、「現実社会で使用されている言語」の実態に関する研究が必要であると主張し、「相互作用の社会言語学 (interactional sociolinguistics)」を提唱した。Joshua Fishman, William Labov も含む文化人類学者や社会学者などで言語研究に携わる10名近くの研究者が、1964年、アメリカ言語学会主催の言語学講座に結集して、言語学においても言語理論に偏ることなく、広範なアプローチを包括する分野が必要であることを訴え、その創造を宣言したのが、アメリカにおける社会言語学の発祥であると言われていたが、彼らの多くが、「実際の会話」をデータとし、「言語使用」の研究の重要性を主張していた。

皮肉にも、「社会言語学」は、言語学の中からではなく、隣接領域で言語の研究を行ってきた研究者たちによって創始されたとも言えるが、その後、言

語学者の Tannen が、自然会話をデータとする「会話スタイル」の研究を進め⁵⁾、1970年代から1980年代にかけて、言語学においても、自然会話や話し言葉の分析は「談話研究」として発展し、社会言語学の中心的位置の一つを占めるようになっていった。このような流れの中で、それまでは、言語学において「言葉のくずかご」と呼ばれていた「語用論」が、「談話研究」と結びついて脚光を浴びるようになり、言語学においてだけでなく、言葉の使い方の教育のニーズが高い「第二言語教育」に関係する分野においても、「話し言葉の研究」が盛んになっていった。「言語研究のくずかご」は、「言語研究の宝庫」へと変貌していったのである。

3.3 欧米の談話研究に刺激を受けて盛んになった日本語の会話における「スピーチレベルシフト」の研究

このような欧米における社会言語学や語用論の動向の影響を受けて、1980年代から1990年代にかけて、日本語の「スタイル」にかかわる研究の中でも、文末スピーチレベルの「使い分け」、「切り替え」、「交替」、「シフト」などの用語が用いられている現象が注目されるようになった。この頃、日本でも「文レベル」に留まる言語研究の限界と問題が指摘され始め、「談話レベル」の分析の必要性が主張されていたため、そのことを実証しようとする一連の研究の中で、スピーチレベルシフトの研究が発展していったといっても過言ではない。

伝統的な敬語研究においては、会話におけるスピーチレベルは、話者間の上下や親疎などの社会的要因を踏まえた敬語使用の原則に基づいて決定されるということが前提とされており、実際の自然会話では、「同じ対話相手との同一談話内においてもスピーチレベルのシフトが生じる」という、前提とは異なる現象については、全く注意が払われてこなかった。

そのような状況の中、まず Ikuta (1983) が、同じ相手との同一談話内においても生じる speech level shift に着目し、日本語における同一談話内におけるスピーチレベルのシフトは、単なる「ゆれ」ではなく、「話者の心的距離の短縮」や「談話ユニット

の移行」などを示す「談話ストラテジー (discourse strategy)」として機能していることを明らかにし、その重要性を主張した。同様の主張を日本語で行った論文 (生田・井出, 1983) では、'speech level' として、「敬語レベル」という日本語が用いられた (その問題については4.2を参照)。その後、三牧は、'speech level shift' として「待遇レベルシフト」という用語を用いて、一連の研究を行っていった (三牧, 1989, 1991, 1993, 1996, 1997, 2000, 2002)。また、宇佐美は、'speech level shift' として、「スピーチレベルシフト」という英語に対応するニュートラルな用語を用いて、それを、文レベルではなく、談話レベルでしか捉えることのできない「談話のストラテジー」の一つとして、ポライトネス理論の観点から一連の研究を行っていった (Usami, 1994; 2002; 宇佐美, 1993b, 1995, 2001a等)。それによって、Brown & Levinsonが提唱した「ポライトネスの普遍理論」(Brown & Levinson, 1987)は、日本語においては、敬語使用の原則の制約が強く影響する「文レベル」では当てはまらないが、スピーチレベルシフトや話題導入頻度などの「談話レベル」の現象を対象とすると当てはまりやすくなることを実証的に示し、真の意味での「ポライトネスの普遍理論」を確立するためには、その対象を談話レベルにまで拡張し、「談話レベルのポライトネス理論」を構築することが必須であると主張した (宇佐美, 1993a, 1998a, 2001b, 2002, 2008b等)。宇佐美の一連の研究は、スピーチレベルシフト自体の機能を解明するということもあるが、むしろ、Brown & Levinsonの「文レベルのポライトネス理論の限界を示す裏づけとなる一連の実証的研究」という位置づけで行われ、「談話レベルのポライトネスの普遍理論」の構築を企図して行われたものである。その他にも、日本語教育研究分野の文脈を中心に、接触場面におけるスピーチレベルシフトを対象とするものなど、「スピーチレベルシフト」を扱う研究は、2000年代に入るとますます盛んになる。

欧米の社会言語学研究において「談話研究」が盛んになるにつれ、日本語を対象とする研究においても、社会的集団ごとの談話の展開パターンの特徴な

どが、「会話スタイル」、「談話スタイル」として研究されるようになった。しかし、複雑な敬語体系を持つ日本語においては、「談話研究」の中でも、まず、「敬語」に関係する「スピーチレベル」の「シフト現象」により多くの興味が集まったと言ってもいいだろう。実際の会話で無意識的に生じる「スピーチレベル」の「シフト現象」は、意識的だというニュアンスが感じられる「スタイルの使い分け」という用語が含意するものとは異なる切り口を提供するものである。談話レベルの分析からしか分かりえない「スピーチレベルシフト」が、「談話ストラテジー」として、親しみの表出や、話題移行の標識として機能することなどが明らかにされていくことによって、日本語の敬語に関する研究も、意識可能な規範としての言語形式の分析だけでなく、「スピーチレベルシフト」や「敬語回避」と呼ばれる現象など、談話レベルの無意識のストラテジーも含む言語行動に拡大することによって、より豊富で有意義な知見をもたらすに違いないとの期待も高まった。

また、母語話者が無意識的に行っている「スピーチレベルシフト」による対人関係の調節は、日本語学習者にとっては、最も難しく習得しにくいことの一つであることが指摘されていた (ネウストプニー, 1982) ことから、日本語教育研究において、母語話者の会話の分析だけでなく、母語話者と非母語話者の接触場面における「スピーチレベルシフト」の研究も、様々な観点から行われるようになった。

以下の表1に、「スタイル」という用語との関係も分かるように、話し言葉における「スピーチレベルシフト」及び、異なる用語 («文体」、「表現スタイル」、「スピーチスタイル」、「敬語レベル」、「待遇レベル」) で言及された現象を扱った研究を、用語ごとに、整理してまとめておく。表1から、「話し言葉」におけるデスマス体と非デスマス体のシフトを扱う研究においては、基本的には、「スピーチレベルシフト」という用語が最も多く用いられていることがわかる。これは、社会言語学でいう「スタイル」のシフトというよりは、「言語形式の丁寧度」

宇佐美：日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望

表1 スピーチレベルシフトに関連する用語のまとめ

用語	研究 (発表年順)
スピーチレベル (スピーチレベル・シフト)	Ikuta (1983), Usami (1994, 2002), 足立(1995), 宇佐美(1995, 1998b, 2001a), 大浜・鈴木・多田(1998), 佐藤・福島(1998), 前田(1999), 岡部・蒲谷(2000), 岡野(2000), 金(2002), 岡部(2003), 陳(2003, 2004a, 2004b), 内藤(2003), 鄭(2004), 谷口(2004a, 2004b), 林(2005), 森(2005), 上仲(2005, 2007), 橋本(2006), 日高・伊藤(2007), 宮武(2007a, 2007b, 2009), 楊(2007), 三原(2009), 古田・堀江(2011), 劉(2013), 嶋原(2014)
スピーチスタイル (スピーチスタイル・シフト)	横須賀(1999), 岡野(2000), 岡部(2003), 伊集院(2004), 大津(2004, 2007), 永井(2007), 申(2007, 2009), ウォーカー(2008), 陳・川口(2012)
待遇レベル (待遇レベル・シフト)	三牧(1989, 1993, 1996, 2002), 佐藤・福島(1998), 江口(1999)
敬語レベル	生田・井出(1983)
文体シフト	岡本(1997), 大塚(2013)
言語形式(文の)スタイル	山口(2002)
スタイル(スタイル切り替え)	前田(1999), 李(2003), 渋谷(2008), 高野(2012)
表現スタイル (スタイル・シフト)	大浜・鈴木・多田(1998), 永井(2007)

注) 宮武(2009)をベースに加筆・改変。下線は、同一論文内で複数の用語を区別して使用しているもの。

のシフトという観点に着眼したものが多いためだと言えるだろう。

3.4 日本語学における書き言葉の「スタイル」のシフトの研究

伝統的な国語学、日本語学では、「スピーチレベル」ではなく、もともと書き言葉の研究で用いられていた「文体」という用語が使われることが多い。例えば、比較的新しい沖森・半沢(1998)でも、「文体の種類として、『だ』調・『である』調(常体)と『です・ます』調・『であります』調・『でございます調』(敬体)の二種類がある」とし、「常体と敬体の混用は避けるべきである」と指摘される。このように、伝統的には、「文体の混用」というと、作文などにおいて避けるべきであるとされてきたという文脈がある。そのため、「混用」という用語には、否定的なニュアンスがつきまとう感は免れず、「文体の混用」という現象とその機能に積極的意味を見出した研究は、ほとんどなかったと言っても過言ではない。

しかし、1980年代半ばから1990年代にかけて、自然会話における「スピーチレベルシフト」の機能が注目されるようになると、まず、メイナード(1991)が、「文体の意味」と題する論文を『月刊言語』

に発表し、スピーチレベルシフト現象を、「ダ体とデスマス体の混用」と呼んで論じた。これに端を発し、それまでの書き言葉における「文体」の研究とは異なる観点から見た「スピーチレベル」の「シフト現象」も、同じ「文体」という用語で言及されることも生じてきた。メイナード(1991)が、スピーチレベルシフトではなく、文体という用語を選択したのは、「自然会話データ」の他に、「小説の会話部分」、「随筆」も対象として、いわゆる「文体混用」の機能を異なるジャンル間で比較しているため、包括的用語として「文体」を選択したと推測できる。

いずれにしても、書き言葉における新たな観点からの「文体混用」の研究の意義は、文体の使い分けが生み出す「表現効果」というものは、「文単位」の研究からは明らかにできず、文レベルを超えて、「談話レベル」で分析して初めて明らかになるということを示したことである。これは、書き言葉研究においても、「談話レベルの研究の必要性」を主張するという、話し言葉研究における動きと共通する視点に支えられていた。

これに触発される形で、書き言葉においても、現在、「文体混用」、「文体シフト」などとも呼ばれている現象が注目されはじめ、文体混用に、「文末一

表2 文体混用に関する用語のまとめ

用語	研究(発表年順)
混用	メイナード(1991), 野田(1998), 熊谷(2001), 黒木(2002, 2006), 石黒(2005), 中村(2011, 2012)
文体(の)混用	メイナード(1991), 熊谷(2001), 中村(2011, 2012)
文末混用	メイナード(1991)
スタイルの混用	メイナード(2004)
スタイルシフト	メイナード(2000, 2001, 2004)
交ぜ書き	石黒(2005)
文体の混在	日本語記述文法研究会(2009)

注) 黒木(2015)をベースに加筆・改変.

貫の原則」に反するものという従来の位置づけとは異なる機能を見出す研究が現れてきた(メイナード, 1991, 2000, 2004; 野田, 1998等). そして, 書き言葉における「文体混用」の研究も, 1990年代後半から2000年代に入ると, ますます盛んに行われるようになった. 上の表2に, 日本語の文章における丁寧体と普通体の混用に関する研究を概観した黒木(2015)を参考に, これまでの書き言葉の「文体混用」に関する研究をまとめた.

書き言葉においては, 「文体」, 「混用」という用語が圧倒的に多いが, メイナードのように, 後に, 「スタイル」, 「スタイルシフト」と用語を変えている場合もある. 「スタイル」の「シフト」は, 書き言葉においても, 様々な表現効果を生むものであることが認識されてきたことを受けて, もはや, 「避けるべきこと」というニュアンスが含意される「混用」という用語はそぐわないという判断かと思われる.

4. 日本語の会話における「スピーチレベル」と「スピーチレベルシフト」に関する研究のまとめ

最後に, これまでに述べてきたような, 背景となる分野の動向や理論の影響を受けながら, 各々の研究者が, 研究目的に基づいて, あるいは, 主張を込めて用いてきた, 日本語の会話における「スピーチレベル」と「スピーチレベルシフト」研究で用いられている「用語」の定義やニュアンスについて, 筆者なりに, 整理してまとめておく.

4.1 「デスマス体」と「非デスマス体」, 「デスマス形」と「非デスマス形」という用語について

これまで様々な研究を概観してきたが, 「スタイル」が種々の言語項目も含むのに対して, 「スピーチレベル」, 「文体」という用語は, 基本的に, 「文末のスピーチレベル」を指している場合が多い. そのため, 基本的には, 個々の研究が「文末のスピーチレベル」を「スタイルを構成する一要素」と捉えるか, 「言語形式の丁寧度」の観点から捉えるかによって, それぞれ「スピーチスタイル」, 「スピーチレベル」という用語が選択されていると言える. また, 英語においても, speech style (Cook, 1998; Okamoto, 1999等)とspeech level (Ikuta, 1983; Usami, 2002等)が, 使い分けられている.

「文末のスピーチレベル」を具体的にどう表すかについても, 基本的に上記の区別に加えて, 「(心的・社会的)距離」の観点, あるいは, 「改まり度」の観点から捉えていることが分かる用語が選択されている. 英語も含めると, いわゆる「丁寧体」は, 「敬体」, 「デスマス体」, 「フォーマルスタイル」, 'Polite form', 'Des-mas form', 'Formal style', 'Polite Style', 'Distal Style'などがあり, 「普通体」は, 「常体」, 「ダ体」, 「カジュアルスタイル」, 'Plain form', 'Non polite form', 'Casual Style', 'Direct Style'などが使われている.

日本語においては, これまで「敬体」と「常体」, 「丁寧体」と「普通体」という用語が, 広く用いられてきた感がある. しかし, 川口(2005)は, 「デスマス体」が日本語の待遇表現にとって最も基本であ

宇佐美：日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望

り、非デスマス体は『親しさ=なれなれしさ』という待遇特徴を鮮明に表すため、それを『常体』とか『普通体』と捉える考え方を改めるべきである」と指摘している。「デスマス体が日本語の待遇表現にとって最も基本である」と固定的に捉えることの是非はともかく、確かに、「敬体」、「丁寧体」に対して、「常体」、「普通体」という用語には、そちらが普通であるというニュアンスがある。同様の考えがあつてか、最近では、「常体」、「普通体」に代わり、「非敬体」、「非丁寧体」などの用語も用いられるようになってきている。

筆者は、会話という相互作用において、実質的なポライトネス効果を生むのは、「言語形式の丁寧度」それ自体ではなく、当該談話の「基本状態」（基調となるスピーチレベル等）からの「シフト」であると考えている（宇佐美, 2001b, 2002, 2008b, 2008c等）。そのため、「敬体」、「丁寧体」というような「敬う」、「丁寧な」というニュアンスも含む用語より、さらにニュートラルで、かつ、よく用いられている「デスマス体」、「非デスマス体」をあえてここまで用いることにした。しかし、より厳密には、「○○体」という言い方には、文体、すなわち、「全体的なスタイル」を表すニュアンスがあることから、使用頻度は多くないが、ディスコース・ポライトネス理論、及び、対人コミュニケーション論の観点からの研究で用いるのには、あくまで「言語形式の丁寧度を示す形態」を表す「デスマス形」、「非デスマス形」という用語が、最も適切ではないかと考えている。以降、「デスマス形」、「非デスマス形」を用いる。

4.2 「スピーチスタイル」、「敬語レベル」、「待遇レベル」という用語について

「スピーチスタイル」というと、ある談話で使われる言葉全体を指すので、「文末スピーチレベル」を扱っていても、少し捉え方が異なることは、先に述べた。一方、「敬語レベル」、「待遇レベル」、「スピーチレベル」という用語になると、ある談話で使われる言葉全体というより、「ある談話の中における「デスマス形」と「非デスマス形」の一時的なシフト」のように、同一談話内における個々の発話の「言語形式の丁寧度」のシフトを客観的に分析しよ

うとする研究で使われることが多い。つまり、これらの研究では、「言葉の使い分け」という言葉が表すような「複数の変種の意識的な使い分け」というよりは、「言語形式の丁寧度の無意識的なシフト」を扱うことが多いと言える。

しかし、主に文末形式を扱う「スピーチレベルシフト」の研究において「敬語レベル」という用語が用いられると、文末形式が全体の「敬語レベル」を表しているというニュアンスになりかねない。また、文末形式のデスマス形と非デスマス形の選択の問題と、「召し上がる」などの尊敬語の使用・不使用の区別が不明確になるため、あまり適切ではないと考える。また、「待遇レベル」という用語は、「言語形式の丁寧度のレベル自体が、相手への待遇のレベルを表すものと捉える」ということを示しているニュアンスになる。しかし、筆者は、「言語形式の丁寧度は、あくまで、言語形式自体の丁寧度レベルを表すもの」であり、それ自体が直接、実質的な「対話相手の待遇」や「相手へのポライトネス」を表すものではないと捉えているため、そのことをより明確に示すために、最もニュートラルな「スピーチレベル」という用語を用いている。これは、英語で研究成果を発信する際にも、同じ用語が使えて、紛らわしさを避けることができるという利点もある。

そういう意味で、主に、個々の文のデスマス形の使用・不使用を指す場合は、「スピーチレベル」という用語が最もニュートラルで適切であると考え

4.3 「スピーチレベル」の分類基準について

次に、スピーチレベルの判断と分類の観点からまとめる。初期の研究では、「尊敬語」や「謙譲語」の使用と、「デスマス形」の使用をあわせて「スピーチレベル」を判断するもの（生田・井出, 1983; 三牧, 1993等）や、尊敬語等の使用・不使用とデスマス形の使用・不使用の区別はするものの、「いらっしゃるの？」などのような尊敬語と非デスマス形の組み合わせの分類法が明示されていないもの（宇佐美, 1995等）等、分類方法に改善の余地があつた。しかし、1990年代後半になると、尊敬語や謙譲語の使用・不使用とデスマス形の使用・不使用を

明確に区別して捉えるもの(宇佐美, 1998b, 2001a等)や, 文末の終助詞の有無も分析の対象とするもの(江口, 1999; 伊集院, 2004; 三牧, 2002; 大浜ほか, 1998; 佐藤・福島, 1998等)など, 分類方法もより詳細になっていった。

その後は, 終助詞の有無の考慮以外にも, 「文末のスピーチレベル」に加えて, 「発話全体のスピーチレベル」として, 尊敬語や謙譲語の使用や「お花」などの「美化語」や軽卑語など, 「語彙の丁寧度」も考慮に入れて分析するもの(岡部, 2003; 上仲, 2005, 2007; 宇佐美, 1998b, 2001a)や, さらに, 「中途終了型発話」のように, 文末に, デスマス形, 非デスマス形のいずれも表れていないものも「文末形式の丁寧度を表すマーカーがない発話」として区別して分析するもの(宇佐美, 1998b, 2001a; Usami, 2002)をはじめとし, 宇佐美の元で修士論文を書いた金(2002), 林(2005), 宮武(2007a, 2007b), 及び, 陳(2001)も同様の分析を行っている。「文末形式の丁寧度を表すマーカーがない発話」を分析対象にすることによって, 社会人初対面同士の会話において約3割を占める「文末に丁寧度を示すマーカーがない発話」が, 全体として, 尊敬語などが, 対話相手との上下関係を明確に示すのを見えにくくする機能があるということを示し, このことから, 「現代の日本語母語話者は, 敬語使用によって対話相手との上下関係が明確に示されることを避ける傾向にある」ことが明らかになったと考察している(宇佐美, 2001b; Usami, 2002)。

また, 林(2005)では, 日本語学習者が母語話者に比べて, 目上に対する言い淀みのない単語レベルの発話(文末形式の丁寧度を表すマーカーがない発話の一部)が多いことを示し, このような簡略化した単語レベルの質問や答えを多用することは, 特に目上に対しては失礼になるという危険性を指摘した。これらのことから, 「文末形式の丁寧度を表すマーカーがない発話」も考慮に入れて分析することが, ディスコース・ポライトネス理論の観点からは, 有意義であることを示した。

さらに, 宇佐美(2001a), Usami(2002)では, 他のほとんどの研究とは異なり, 「スピーチレベルシフ

ト」を, 同一話者内のシフトだけでなく, 直前の相手の発話からのシフトも分類して分析し, 相手に合わせる形でスピーチレベルをシフトさせることもあることなどを明らかにしている。

このような「相手に合わせる」という「相互作用」を考慮に入れた動的な観点からの分析も含む研究を見ると, 「同一話者内の言語変種の使い分け」に焦点を当てた「スピーチスタイルシフト」とは異なる観点からの分析であることがより明確になるだろう。陳(2004b)によると, 直前の相手の発話からのシフトも分析対象としているのは, 他には, 金(2002)だけであるとある。その後もあまり展開がないが, 「言語的相互作用」の観点からは, 今後, もっと研究が行われてもいいところだろう。

さらに, 陳(2004b)では, デスマス形が基調の会話で, 一旦, デスマス形から非デスマス形にダウンシフトした後, そのまま非デスマス形の発話が複数回連続する現象を取り上げ, これらを扱った研究がこれまでにないと述べ, その必要性を指摘している。しかし, この現象は, 既に, 宇佐美(2001b), Usami(2002)で, 「ダウンシフト」, 「アップシフト」とともに, 「ノーシフト」, No shiftとして扱われている。ただし, その機能については, 書き言葉における「従属文」(野田, 1998)と同様の機能があるのではないかということに留まっているので, 今後, より詳細な研究が望まれるところである。

4.4 ローカルな観点, グローバルな観点双方からの分析の必要性

これまでに概観してきたように, スピーチレベルシフトに関する研究には, 様々な観点からのものがある。ただ, その多くは, ローカルな分析(多くは, 定性的分析)か, グローバルな分析(多くは, 定量的分析)のどちらか一方になっている。ただ, 本来は, その双方を適切に用いることによって, どちらか一方の分析では明らかにできなかったことが分かることもあり, ローカル, グローバル双方の観点からの分析の重要性が強調されている(宇佐美, 2008c)。例えば, 宇佐美(1995, 2001b)では, ローカルな分析からは, 社会人の初対面会話におけるスピーチレベルのデスマス形から非デスマス形へのダ

ウンシフトの機能の一つに、「心的距離の短縮」があるとしたが、対話相手の年齢と性別を統制したデータ収集法によって、グローバルな観点からの分析も行っているため、その「心的距離の短縮」のためのダウンシフトは、「目上、異性の相手には、ほとんど起こらない」ことも明らかにした。つまり、ローカルな分析によって、様々な機能を明らかにすることは、当然、意味があるが、それだけに留まらず、それらのシフト操作が、誰に対しても行われているわけではないという、より掘り下げた結論も、ローカルな分析だけでなく、グローバルな分析も行ったことによって、導き出されたのである。

5. おわりに

2000年代に入って、「スピーチレベルシフト」研究は、多様な広がりを見せている。母語話者の会話の観察から始まって、非母語話者との接触場面における会話を対象としたものや、電子メールやチャットを対象としたもの、多言語の同様の現象との対照研究等々である。整理して論じたかったが、紙幅が尽きてしまった。そのいくつかは、表1、表2にも含まれている。また、最近の動向の具体的概観については、陳(2004b)、宮武(2009)にもまとめられているので、それらも参考にしながら、新たな展開の可能性を考えていただければと思う。というのは、「スピーチレベルシフト」現象の発見が、談話研究やポライトネス理論研究の新たな展開に少なからぬ影響を与えた1990年代初頭から、既に四半世紀を経た現在、具体的な現象の記述研究は多岐にわたっているが、記述研究が多様になった分、それらがより大きな「理論的な枠組み」や「言語観」とどのような関係にあるのか、また、関係づけようとしているのかが、見えにくくなっているようにも感じられるからである。「スピーチレベルシフト」現象の発見と、その後の談話研究、談話のポライトネス理論への発展の予感に胸をときめかした頃の、あの新鮮な研究への情熱を思い起こすとともに、今後、広義の「スタイルにかかわる研究」がより大きい目的や理論的構想に発展していくことに期待したい。

注

- 1) 「相互作用の社会言語学」(interactional sociolinguistics)は、言語人類学者のJ. Gumperzが唱えたが、彼の元で学んだ社会言語学者のD. Tannenが、「会話の分析」という形で一連の研究を行った。
- 2) ただ、Gumperzの後を引き継ぐ形になったTannenが、元々社会性の強かった目的を、より言語学的な目的をもって推進した感があり、その流れを受け継ぐ形で発展した社会言語学における「会話分析」には、成果も多いが、一方、恣意的な分析と言わざるを得ないものも多く、方法的には問題が多いと筆者は捉えている。
- 3) 「談話分析」、「会話分析」、「談話研究」の用語の区別については、(宇佐美, 2000)を参照。
- 4) 号によって、language behaviorなど他の用語も用いられているが、language lifeが最も多い。
- 5) ただし、Tannenの方法論には、問題が多いことは、注2)で述べた。

【参考文献】

- 足立さゆり (1995). 日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト 拓殖大学日本語紀要, 5, 73-87.
- Austin, John L. (1962). *How to do things with words*. Oxford: Clarendon.
- Brown, Penelope & Levinson, Stephen C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 陳新・川口良 (2012). 中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する一考察 言語と文化, 25, 70-100.
- 陳文敏 (2001). 接触場面の会話に見られる「中途終了型発話」—台湾人日本語学習者の場合— 言葉と文化, 2, 175-191.
- 陳文敏 (2003). 同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやす状況とその頻度をめぐって— 日本語科学, 14, 7-28.
- 陳文敏 (2004a). 台湾人上級日本語学習者の初対面接触会話におけるスピーチレベル・シフト—日本語母語話者同士による会話との比較— 日本語教育論集, 20, 18-33.
- 陳文敏 (2004b). スピーチレベル・シフト研究の現状と課題 日本学と台湾学, 3, 28-48.
- Cook, Haruko, Minegishi (1998). Situational meaning of the Japanese social deixis: The mixed use of the masu and plain forms. *Journal of Linguistic Anthropology*, 8(1), 87-110.
- 江口英子 (1999). 調査報告：ティーチャートークにおける談話の展開標識としての待遇レベル・シフト 日本語教育, 102, 60-67.
- FitzGerald, Helen (2003). *How different are we? Spoken discourse in intercultural communication*. Multilin-

- gual Matters. (村田泰美監訳 (2010). 文化と会話スタイル—多文化社会・オーストラリアに見る異文化間コミュニケーション— ひつじ書房)
- 古田朋子・堀江薫 (2011). 介護現場における入浴場面での介助者と利用者との関係構築—スピーチレベル・シフトとポジティブ・ポライトネス・ストラテジーからの考察— 日本語用論学会大会発表論文集, 7, 245-248.
- Gumperz, John, J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hall, Edward T. (1976). *Beyond culture*. New York: Doubleday. (岩田慶治・谷泰訳 (1979). 文化を超えて TBS プリタニカ)
- 橋本拓郎 (2006). 日本人学生の初対面会話におけるスピーチレベルの機能—中間的なスピーチレベルの分析を基に— 言語と文明, 14, 77-102.
- 日高水穂・伊藤美樹子 (2007). スピーチレベルシフトの表現効果—シナリオ「12人の優しい日本人」を題材に— 人文科学・社会科学, 62, 1-12.
- Hymes, Dell (1974). Linguistic theory and functions in speech. In D. Hymes (Ed.), *Foundations in sociolinguistics: An Ethnographic approach*, pp. 145-178. Philadelphia University of Pennsylvania Press.
- 伊集院郁子 (2004). 母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違— 社会言語科学, 6(2), 12-26.
- Ikuta, Shoko (1983). Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Sciences*, 5(1), 37-53.
- 生田少子・井出祥子 (1983). 社会言語学における談話研究 月刊言語, 12(12), 77-84.
- 石黒圭 (2005). 第5講 丁寧形と普通形の混用の可否 石黒圭(著) よくわかる文章表現の技術III—文法編— pp. 81-105. 明治書院
- 岩淵匡 (1980). 言語生活—昭和53・54年における国語学界の展望— 国語学, 121, 115-120.
- 川口義一 (2005). 海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前課題」分析(3)— 早稲田大学日本語研究教育センター紀要, 16, 37-50.
- 金珍娥 (2002). 日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルのシフト 朝鮮学報, 183, 51-91.
- 金田一春彦 (1957). 言語生活—第一部 終戦後・昭和三十年まで—昭和31年に於ける国語学界の展望— 国語学, 30, 92-96.
- 金水敏 (2007). 「役割語」と社会言語学の接点 シンポジウム: 社会言語学における「人の社会的属性」の扱いを問い直す 第19回社会言語科学会研究大会基調講演
- 国立国語研究所編 (1955). 談話語の実態 国立国語研究所
- 熊谷滋子 (2001). 新聞投書にみる文体の効果—「ですます体」と「非ですます体」の混用を通して— 人文論集, 52(1), 273-286.
- 黒木晶子 (2002). 日本語の文章における丁寧体と普通体の混用について—学術論文における謝辞の文章の分析を通して— 文教国文学, 46, 90-106.
- 黒木晶子 (2006). 日本語母語話者が書いた小論文に関する一考察—丁寧体と普通体の混用についての分析を中心に— 文教国文学, 50, 65-78.
- 黒木晶子 (2015). 日本語の文章における丁寧体と普通体の混用に関する研究の概観—「混用」という用語の扱いについて— 文教国文学, 59, 35-40.
- 李吉鎔 (2003). フォーマルな談話での非デスマスの切替え—日本語母語話者と中間言語話者との比較— 阪大社会言語学研究ノート, 5, 79-96.
- 林君玲 (2005). 台湾人学習者の初対面日本語会話におけるスピーチレベルの使用実態 宇佐美まゆみ(編) 言語情報学研究報告6 自然会話分析と会話教育—総合的モジュール作成への模索— pp. 261-280. 東京外国語大学大学院
- 劉雅静 (2013). 友人同士3者間会話におけるスピーチレベルシフトについて—上下関係のある親しい友人同士の会話データをもとに— 言語学論叢オンライン版, 6, 34-48.
- 前田理佳子 (1999). 在日コリアン—世の談話におけるスタイル切り替え—スピーチレベルシフトの様式に着目して— 待兼山論叢, 33, 33-48.
- 前川喜久雄 (2014). 国立国語研究所における言語資源開発 言語処理学会20周年記念シンポジウム 講演パワーポイント
- 真嶋潤子 (2005). 学習者の個人差と第二言語習得—「学習スタイル」を中心に— 第二言語としての日本語の習得研究, 8, 115-134.
- メイナード, 泉子・K (1991). 文体の意味—ダ体と丁寧体の混用について— 月刊言語, 20(2), 75-80.
- メイナード, 泉子・K (2000). 「キッチン」と「とかげ」における語り手の情意—英訳との比較対照— メイナード, 泉子・K(著) 情意の言語学—「場交渉論」と日本語表現のパトス—, pp. 327-350. くろしお出版
- メイナード, 泉子・K (2001). 心の変化と話しことばのスタイルシフト 月刊言語, 30(7), 38-45.
- メイナード, 泉子・K (2004). 6.2ダ体とデス・マス体—スタイルシフトの表現性— メイナード, 泉子・K (著) 談話言語学, pp. 99-109. くろしお出版
- 三原千佳 (2009). 接触場面における適切性とスピーチレベルシフト—質問・確認への返答に注目して— 日本語・日本文化研究, 19, 179-189.
- 三牧陽子 (1989). 待遇レベル・シフトの談話分析 AKP紀要, 3, 34-50.
- 三牧陽子 (1991). 待遇表現の体系的把握—日本語教育の視点から— 吉田弥寿夫(監修) 日本語教育論集, pp. 280-291. 学習研究社
- 三牧陽子 (1993). 談話の展開標識としての待遇レベル・シフト 人文科学, 42(1), 39-51.
- 三牧陽子 (1996). 待遇レベル・シフト 言語探究の領域

宇佐美：日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望

- 小泉保博士古稀記念論文集, pp. 437-445. 大学書林
- 三牧陽子 (1997). 対談におけるFTA補償ストラテジー—待遇レベル・シフトを中心に— 多文化社会と留学生交流, 1, 59-78.
- 三牧陽子 (2000). 丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして— 多文化社会と留学生交流, 4, 37-53.
- 三牧陽子 (2002). 待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に— 社会言語科学, 5(1), 56-74.
- 南不二男 (1974). 言語生活—昭和47・48年における国語学界の展望— 国語学, 97, 117-125.
- 宮武かおり (2007a). 日本人友人間の会話におけるポライトネス・ストラテジー—スピーチレベルに着目して— 東京外国語大学大学院地域文化研究科平成18年度修士論文
- 宮武かおり (2007b). 日本人友人間の会話におけるスピーチレベルの実態 TUFSS言語論集, 2, 19-31.
- 宮武かおり (2009). 日本語会話のスピーチレベルを扱う研究の概観 コーパスに基づく言語学教育研究報告, 1, 305-319.
- 森勇樹 (2005). 談話におけるスピーチレベルシフト—中国人日本語学習者と日本語母語話者の談話資料の比較から— 語文と教育, 19, 142-129.
- 永井涼子 (2007). 看護師による「申し送り」会話の談話交替管理—スタイルシフトを中心に— 日本語教育, 135, 80-89.
- 内藤真理子 (2003). あいづちのスピーチレベルとそのシフトについて—日本語母語話者と韓国人学習者の相違— 世界の日本語教育, 13, 109-125.
- 中村重穂 (2011). 文体混用に関する一考察—「だ・である」体の「です・ます」体への混用について— 北海道大学留学生センター紀要, 15, 20-39.
- 中村重穂 (2012). 文体混用に関する一考察・その2—「です・ます」体の「だ・である」体への混用について— 北海道大学留学生センター紀要, 16, 71-92.
- ネウストプニー, Jiri V. (1982). 外国人とのコミュニケーション 岩波新書
- 日本語記述文法研究会 (2009). 丁寧体と普通体 日本語記述文法研究会(編) 現代日本語文法7 第12部: 談話 第13部: 待遇表現, pp. 269-279. くろしお出版
- 野田尚史 (1998). 「ていねいさ」からみた文章・談話の構造 国語学, 194, 102-89.
- 大浜るい子・鈴木雅恵・多田美有紀 (1998). 自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象 教育学研究紀要, 44, 389-397.
- 岡部悦子 (2003). 高校生・交換留学生のスピーチレベルシフト—女子学生の課題解決場面を例として— 長崎外大論叢, 6, 23-34.
- 岡部悦子・蒲谷宏 (2000). 日本語学習者の口頭発表場面におけるスピーチレベルについて 講座日本語教育, 36, 111-134.
- 岡本能里子 (1997). 教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け— 日本語学, 16(3), 39-51.
- Okamoto, Shigeko (1999). Situated politeness: Manipulating honorific and non-honorific expressions in Japanese conversation. *Pragmatics*, 9(1), 51-74.
- 岡野喜美子 (2000). 留学生の待遇表現使用—発話調査の結果から— 早稲田大学日本語教育センター紀要, 13, 1-13.
- 沖森卓也・半沢幹一 (1998). 日本語表現法 三省堂
- 大津友美 (2004). 親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス—「遊び」としての対立行動に着目して— 社会言語科学, 6(2), 44-53.
- 大津友美 (2007). 会話における冗談のコミュニケーション特徴—スタイルシフトによる冗談の場合— 社会言語科学, 10(1), 45-55.
- 大塚容子 (2013). 初対面の3人会話における文体シフトの効果—「ディスコース・ポライトネス」の観点から— 岐阜聖徳学園大学紀要, 52, 17-27.
- Sacks, Harvey (1963). Lectures on Conversation. In G. Jefferson (Ed.), *Lectures on conversation*, Vols. I and II. Oxford: Blackwell (1995 reprint版).
- 佐藤勢紀子・福島悦子 (1998). 日本語学習者と母語話者における発話末表現の待遇レベル認識の違い 東北大学留学生センター紀要, 4, 31-40.
- 渋谷勝己 (2008). スタイルの使い分けとコミュニケーション 月刊言語, 37(1), 18-25.
- 申媛善 (2007). 日本語と韓国語における文末スタイル変化の仕組み—時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して— 日本語科学, 22, 173-195.
- 申媛善 (2009). 韓国人日本語学習者の文末スタイルの運用—時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して— 日本語教育, 140, 81-91.
- 嶋原耕一 (2014). 母語場面及び接触場面の同等初対面会話におけるアップシフトについて 社会言語科学, 16(2), 66-74.
- 高野照司 (2012). ことばのスタイルを理解し応用する 日比谷潤子(編) はじめて学ぶ社会言語学, pp. 248-269. ミネルヴァ書房
- 谷口まや (2004a). 日本語教材におけるスピーチ・レベル・シフトの取扱いについて AJALT日本語研究誌, 2, 35-51.
- 谷口まや (2004b). 日本語の講演の談話におけるスピーチ・レベル・シフトの形態と機能 早稲田大学日本語教育研究, 4, 117-129.
- Tannen, Deborah (1984). *Conversational style: Analyzing talk among friends*. Norwood: Ablex Publishing Corporation.
- 津田早苗・村田泰美・大谷麻美・岩田裕子・重光由加・大塚容子 (2015). 日・英談話スタイルの対照研究—英語コミュニケーション教育への応用— ひつじ書房

- 上仲淳 (2005). テレビドラマの登場人物にみるスピーチレベルの様相 姫路独協大学外国語学部紀要, 18, 291-310.
- 上仲淳 (2007). 中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準 大阪大学言語文化学, 16, 141-154.
- 宇野義方 (1959). 言語生活—昭和33年における国語学会の展望— 国語学, 38, 119-128.
- 宇佐美まゆみ (1993a). 談話レベルから見た“politeness”—“politeness theory”の普遍理論確立のために— ことば, 14, 20-29.
- 宇佐美まゆみ (1993b). 初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析—対話相手に応じた使い分けという観点から— 学苑, 647, 37-47.
- Usami, Mayumi (1994). *Politeness and Japanese conversational strategies: Implications for the teaching of Japanese*. Unpublished qualifying paper submitted to Harvard University.
- 宇佐美まゆみ (1995). 談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能— 学苑, 662, 27-42.
- 宇佐美まゆみ (1998a). ポライトネス理論の展開—ディスコース・ポライトネスという捉え方— 日本研究教育年報 (1997年度版), 145-159.
- 宇佐美まゆみ (1998b). ディスコース・ポライトネス・ストラテジーとしてのスピーチレベル・シフト 平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 110-115.
- 宇佐美まゆみ (2000). 談話研究と言語教育 AJALT, 23, 22-26.
- 宇佐美まゆみ (2001a). 「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること— 語学研究所論集, 6, 1-29.
- 宇佐美まゆみ (2001b). 談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想— 談話のポライトネス, 9-58.
- 宇佐美まゆみ (2002). ポライトネス理論の展開 (1-12) 月刊言語, 31(1-5, 7-13), 毎号6頁.
- Usami, Mayumi (2002). *Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- 宇佐美まゆみ (2008a). 社会言語・言語生活—2006年・2007年における日本語学界の展望— 日本語の研究, 4(3), 88-97.
- 宇佐美まゆみ (2008b). ポライトネス理論研究のフロンティア—ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論— 社会言語科学, 11(1), 4-22.
- 宇佐美まゆみ (2008c). 相互作用と学習—ディスコース・ポライトネス理論の観点から— 西原鈴子・西郡仁朗 (編) 講座社会言語科学4 教育・学習, pp. 150-181. ひつじ書房
- ウォーカー, 泉 (2008). 初級学習者のスピーチスタイルに関する「気づき」—待遇コミュニケーション教育に関する考察— 早稲田大学日本語教育学, 2, 15-28.
- 山口和代 (2002). ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知—中国人ならびに台湾人留学生と日本人母語話者との比較の視点から— 社会言語科学, 5(1), 75-84.
- 楊敏 (2007). 文体混用と表現意図—丁寧体から普通体へのシフトについて— 文体論研究, 53, 25-35.
- 横須賀柳子 (1999). 授業場面における教師のスピーチ・スタイル ICU日本語教育研究センター紀要, 9, 61-76.
- 吉岡泰夫 (2004). 社会言語・言語生活—2002年・2003年における日本語学界の展望— 国語学, 55(3), 99-107.
- 鄭賢貞 (2004). 日本語と韓国語の談話におけるスピーチレベルシフト 日本語教育と異文化理解, 3, 35-43.

(2015年4月19日受付)

(2015年7月31日修正版受付)

(2015年8月13日掲載決定)